2012年度　　JBBB

国　　語

注　意

1. 問題は全部で13ページである。
2. 解答用紙に氏名を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. **HB**の黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ○ を塗りつぶしなさい。○で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

バブル期以来、いやそれ以前から子どものころから知っていた家々が壊されるのを、私は眼にしつづけてきた。小さな町、それが根こそぎ壊された事態も眺めてきた。そしていつの間にやら一軒の家が消えたとしても驚くことはなくなった。とはいえそのたびに胃の腑の底になにかが沈澱する感じは残る。

ところで今年の春に小さな一冊を読んで、少なからぬ衝撃を受けた。『中野本町の家』から受けた衝撃は言葉にして伝えるのは難しい。これは特異な本である。けれど、だからこそそこに［　A　］もあるのではないか、そう思いながら再読してみた。

対象となった「中野本町の家」とは、建築家伊東豊雄が実姉である後藤暢子と、彼女の娘幸子、文子のために設計し、一九七六年に竣工した個人住居である。もう一〇数年前になるが、私はこの家を伊東氏の案内で見学している。

この家は単純ながらじつにユニークな形をもっていた。敷地は二〇メートル四方の正方形で百坪強。中庭を囲む馬蹄形の平面をもつコンクリート造の平屋である。といってもわかり難いだろう。まず床幅三・六メートル、天井は高さ三・九メートルから二・二メートルへと片流れに傾斜している、長さ四五メートルのコンクリートの細長い箱を思い浮かべてほしい。壁も天井も白く仕上げられ、床も白いカーペットが敷きつめられている。この真っ白く長い箱が、天井高の低いほうを折ってU字型にワンキョクしていて、そのなかにいくつかの部屋が配されている。

このユニークな形のため海外では「White U」の名称で知られた。もっと卑近な喩えを使えば、洋式便座に似ている。周囲のマンション住民たちは上から見下ろして、この家を便座の家と呼んでいたらしい。

道路側から眺めるとU字型の曲面部、コンクリート打ち放しの円筒型の高い外壁しか見えない。眼にはコンクリート製の要塞に映った。けれど室内に入った瞬間、［　B　］。空気さえ変わった気がした。人間のさり気ない動きさえ気にかかった。それほど白く静謐な空間は精神的な緊張感をもたらした。強い家だなと思った。つまり「中野本町の家」に圧倒されたのである。

この家が竣工して二一年経ち、一九九七年に取り壊された。この事実を知ったからといって私はさして驚かなかった。

C

ところが、この家に住んだ三人が、暮らした日々とその帰趨[c]とを、それぞれ率直に語った一冊の本『中野本町の家』には衝撃を受けたのである。

まず後藤暢子は家を建てるまでの経過を説明している。じつは「中野本町の家」は、彼女の夫が一年半ほど入院生活を送り、没した直後に建てたのだった。だから彼女には単に家を求める以上の強い契機があった、マイホーム的な住宅は求めず、自分の心の「闇の状態」を照らすような「鮮烈に射しこんでくるような光」を「強く欲していた」のである。

この施主の要求に設計者は明確な解答で応えた。見学した際、亀裂のような天窓から光が、曲面を描いたリビングに射し込んでいたことを思い出す。にもかかわらず、二〇年住んで彼女は「もうこの家に居ることはできない」と決断を下す。「住む人間に働きかけてくる建築自体の力がひじょうに強くて、わたくしが住み心地をよくしようと努力すればするほど、建物との相性が悪くなってゆく。建物とわたくしの努力が、うまく溶け合わないのです」。

ここで注意したいのは、建築家の設計した個性的な家によく起きるような理由で、彼女が[1]建築家のエゴを責めているわけではないことだ。竣工当時は彼女の心理に建築はぴったり適っていた。が、D「建築が絶えずわたしを、それを建てた状態にひき戻すのです。E わたくし自身は、二〇年間とはちがった積極性をもって、いま現在を生きている」。

まずこの彼女の言葉に私は衝撃を受けた。建築がかくも人間の精神や身ぶりに働きかける力をもつのかと思う F 、それを認めるからこそ新しい途を進もうとする、彼女の意志にである。彼女は「中野本町の家」を否定しない。G「積極的な言い方」として「住宅建築というものが[2]そうした可能性を秘めている」と、建築が持つ強さを肯定している。

長女の幸子は、[3]この母暢子の気持ちを思いやる。この家の印象として「感覚的に『墓石』というものを感じた」と彼女は語る。「独りの女性が女としての生き方をここに『埋葬した』という意識を娘としてもってしまったものですから、それはやめてほしいなと思いました」。彼女が考えるのは家族のことだ。この家からは「家庭」というイメージを持たなかったと語りながら、「家族」

という関係を考える。「家族というのは独立した個人の集まりであって、その関係は、一人ひとりがどこにどうあろうと、離れていても一緒にいても死ぬまで変わらない」。こう語りつつ、彼女もこの家を離れ、独り自立した旅をはじめようとする。

母と娘の、こうした発言を、経済的に余裕があるからとだけ見るならば、それこそ私たちはすべてにおいて家に住む権利も、またそれを離れる権利も見失っているというほかはない。眼玉をひっくり返さなければならない。

そして私がもっとも感嘆したのは次女文子の言葉だ。彼女は「中野本町の家」が本当に好きだった。だから母と姉がそれぞれ家を離れた後も独りで、この家に住み続けた。ところが、あるとき、「自分がここにいるにもかかわらず家が後退していくような感じ」を抱く。

「ここは新宿に近いためか急激に地域の様子が変わる場所で、本当に周囲がどんどん、どんどん変わりました。(略)ふと建築について考えるとき、やはり『その地域のなかでの建物』ということも大きな意味を持つように思うのです。(略)こんなにまわりが汚くなっていくなかで、すぽっとここだけ落ち込んでしまうように感じました」。

三人は事前に話し合って語っているわけではない。自分の言葉で、家について、そして考えた末にこの家の取り壊しと他人には譲渡しないことを決めた理由を説明している。インタビューはヴィデオに収録された後、活字に直された。ヴィデオを観た伊東事務所のスタッフは、率直な彼女たちの声に「これから建築をつくるのが怖い」と呟いたらしい。しかし、これは間違いだ。これほど愛惜の深い家への弔辞を私は知らない。

母は自分の過去を重ね、姉は家族を考え、そして妹は地域にまで思いを伸ばす。一軒の家、そしてその［ H ］は住み手に深い思索をもたらした。

記憶、家族、地域。これらの言葉を私たちはたやすく口にする。けれど、本当に身のうちに置いて私たちは語りうるか。なにがあの住居を後退させたのか、こう考える契機を三人の女性は私に残し、それぞれの途を歩きはじめた。

読了後、あの家は傑作だった、惜しかったなと思う反面、［ I ］の予感で気持ちはさわやかだった。

(松山巌『路上の症候群』による)

問一　空欄 [A] に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は [1]。

① 教訓　② 一般性　③ 反省点　④ 普遍性　⑤ 美点

問二　空欄 [B] に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は [2]。

① 眉をひそめた　② 襟を正した　③ 身を縮めた　④ 肩をいからせた　⑤ 息を呑んだ

問三　空欄 [C] に入る文として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は [3]。

① 一軒の家が打ち砕かれるのをもう見慣れていたし、この国は残すべき建物でも次々と壊しつづけてきたからである。

② この建物は持ち主に対してだけでなく、周辺の住民にとっても得体の知れない圧迫感を与えていたからである。

③ なんといってもこれほど広大な敷地と建築物とを維持していくにはよほど潤沢な資産が必要だったからである。

④ この時期、土地や住居は住み続けるものではなくして、売り買いするための不動産として認識されていたためである。

⑤ 現代建築史に残るにちがいないこの家を買い取りたいという物好きな申し出は、引きもきらずにあったためである。

問四　傍線部1「建築家のエゴ」とはどういうことか。説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は [4]。

① 建築に作品としての芸術性を打ち出そうとするあまり独善的な家を建ててしまう。

② 有名な建築家が建物の規模からして高すぎる報酬をしばしば請求してくる。

③ 施主と設計者の人間関係が近すぎるため、建築家の側で我を通してしまう。

④ 設計の専門家としての建築家が施主を素人とみなしてその要求を聞かない。

⑤ 自分の趣味の特殊性に気付かない建築家が趣味の悪い家を建ててしまう。

問五　空欄 [D] に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は [5]。

① むしろ　② にもかかわらず　③ と同時に　④ それゆえに　⑤ けれども

問六　空欄 E に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 6 。

① むしろ　② にもかかわらず　③ と同時に　④ それゆえに　⑤ けれども

問七　空欄 F に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 7 。

① むしろ　② にもかかわらず　③ と同時に　④ それゆえに　⑤ けれども

問八　空欄 G に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 8 。

① むしろ　② にもかかわらず　③ と同時に　④ それゆえに　⑤ けれども

問九　傍線部2「そうした可能性」とは何か。説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 9 。

① 建築が居住者の精神や生き方に作用する力さえ持つ可能性

② 建物が居住者の心理をうまくコントロールする可能性

③ 心に闇を抱えた居住者を包み込み救済する可能性

④ 居住者を地域につなぎ止め、社会的な関係を開く可能性

⑤ 設計者の主張が居住者の精神をもひき潰してしまう可能性

問十　傍線部3「この母暢子の気持ちを思いやる」とあるが、長女の思いとして最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 10 。

① 夫を看取った後、残された子どもを育てて老いていった母にはかなわないと思っている。

② 母の思いを受け止めて、個人の独立と家族の関係は調和するはずだと考えている。

③ 夫と子どもの世話をするため個としての生き方を犠牲にした母に抵抗している。

④ 生きたまま墓石に入ったような母を一世代前の女性と見なして一歩距離を置いている。

⑤ 母親の生き方を反面教師として、自分は自立した生き方をしたいと考えている。

問十一　空欄 H に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 11 。

①　失　敗　　②　倒　壊　　③　再　生　　④　静けさ　　⑤　死

問十二　空欄 I に入る語句として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 12 。

①　原初への回帰　　②　つつしみ　　③　はじまり　　④　快　癒　　⑤　ハッピーエンド

問十三　二重傍線部a「ワンキョク」を漢字に直す場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 13 。

①　褶　曲　　②　湾　曲　　③　婉　曲　　④　碗　極　　⑤　洩　極

問十四　二重傍線部b「静謐」の読みとして、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 14 。

①　せいしつ　　②　じょうびゃく　　③　せいじょう　　④　せいひつ　　⑤　しょうひつ

問十五　二重傍線部c「帰趨」の読みとして、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 15 。

①　き　す　　②　こしゅ　　③　きしゅ　　④　かえりゆき　　⑤　きすう

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

デカルトは『方法序説』において、一般的にある命題が真であり確実であるためには、それが「明晰にして判明」にとらえられることが必要十分条件であると考えた。ちなみに、彼の他の著作（『哲学原理』）で与えられている定義によれば、「明晰」な認識とは「注意する精神に現前し、かつ明らかである認識」をいい、「判明」な認識とは「明晰であると同時に、他のすべてのものから分離され、かつ切り離されていて、みずからのうちに明晰なもの以外は何も含まないような認識」をいう。要するに、ある認識がそれ自体、疑うヨチ[a]のない明白なものとして立ち現れ、［A］他といっさい混同される恐れがない場合、著者はこれを「真」とみなすというのである。

このとおり、デカルトは「明晰」という概念を認識のありようについて用いているわけだが、これを具体的に文章表現そのものに適用してみると、フランスの特質を論ずるさいに、しばしば引用される有名なフレーズが思い出される。そう、「明晰でないものはフランス語ではない」という、あの一句である。

この文の筆者は、アントワーヌ・ド・リヴァロール（一七五三～一八〇一）。一七八二年に募集されたベルリン・アカデミーの懸賞に「フランス語の普遍性について」と題する論文で応募し、もうひとりのドイツ人とともに賞を分け合ったことで文学史に名を残した（ちなみに、このときの課題は、(1)なにがフランス語を普遍的たらしめたのか、(2)フランス語はなぜ[1]そのような特権に値するのか、(3)フランス語はその特権を保持できると思われるか、の三点であった）。

[2]件の一文はこの論文中に現れるのだが、デカルトから一世紀半を経て登場したリヴァロールは、「明晰」という言葉をどのような意味で用いているのだろうか。正確をキ[b]するために、前後の文脈を含めて該当箇所を引いておこう。

フランス語だけが、独自の特権によって、あたかもそれがまったくの道理であるかのように、直接的語順に忠実なままでありつづけた。そして、いくら文体を多彩に変動させ、文体上のあらゆる手段を用いてこの語順に扮装を施してみたとして

も、[3]それは常に存在することをやめはしない。さまざまな情念が私たちを動転させ、感覚の順序に従うように要請したとしても、そうはいかない。フランス語の構文は不滅なのだ。そこから、あの賛嘆すべき明晰さ、私たちの言語の変わらぬ基盤が結果として出てくる。明晰でないものはフランス語ではない。明晰でないものは、英語、イタリア語、ギリシア語あるいはラテン語ではありうるが。

この文章を見れば一目瞭然のように、リヴァロールがここでフランス語の明晰さの根拠としているのは「直接的語順」と呼ばれているものであり、具体的には「主語―動詞―目的語」という文法要素の並び方である。ある命題を提示するのに、フランス語では他の諸言語のように、この順番を転倒させることはできないし、主語を省略したりすることもできない。この構文上の要請は理性の秩序に従ったものであるがゆえに、すべての人間にとって自然な法則であり、だからこそフランス語は唯一の普遍言語として他の言語に優越するのだというのが、懸賞課題にたいするリヴァロールの解答なのである。

ある言語がその文法構造ゆえに無前提（アプリオリ）に明晰であるというのは、いかにも説得性を欠いた主張だし、フランス語で書かれた文章がすべて明晰なわけでないことも経験的に明らかであるように思われるが、［　B　］、リヴァロールの言葉はいつしかひとり歩きを始め、[4]「フランス語は明晰な言語である」という神話を定着させてしまった。

のみならず、そこからは「フランス人は明晰に思考する傾向がある」とか、「フランス人の書く文章は一般に明快で論理的である」などといった、当のリヴァロール本人が述べてもいなければ、おそらくは考えてもいなかったであろう通念が派生してくる。

問題はリヴァロールの主張そのものよりも、むしろこれを――おそらくはまったくの善意からではあろうが――歪曲して流布させた後世の人々の不用意さ、あるいは無自覚さにあるというべきか。ともあれ、彼のいう「明晰さ」が「個々の文章の明晰さでも、説得すべき論旨の一貫性でもなく、ひたすら語順と構文法の問題だという点」については、蓮實重彦の「明晰性の神話」という文章が余すところなく論じているので、そちらを参照していただきたい。

いまはそのうえで、それでもやはり一七世紀から一八世紀にかけてのフランスにおいては、表現の「明晰さ」がひとつの公理として標榜されていたという事実を確認しておきたいと思う。リヴァロールの言葉は彼自身の創意になるというよりも、当時のさまざまな言説を総合し、凝縮した結果として現れたと考えるべきだろう。

ところで、リヴァロールが応募した懸賞論文の第一課題は「なにがフランス語を普遍的たらしめたのか」というものであった。この問いは、当然のようにフランス語が普遍的な言語であるということを前提としている。しかも、その問いを発しているのが、フランスではなくベルリンのアカデミーであったという事実は、この認識が当時、[5]ヨーロッパの他地域でも広く共有されていたことを物語っている。

一六世紀のルネサンス期まで、ラテン語の俗語であるフランス語は文法も語彙も未整理で、雑然としていた。しかし、太陽王ルイ一四世(在位一六四三〜一七一五)の統治する一七世紀の絶対王政下では、それが厳密に規格化され、固有の[6]「国語」として純化されていく。一六三五年には宰相リシュリューの[7]肝煎りで、四〇名の会員から成るアカデミー・フランセーズが創設されたが、その主たる任務は規範的な辞書の編纂であり、世紀末の一六九四年には第一版が世に送り出された。

国家的な企図のもとに整備されていったフランス語は、やがて一八世紀を迎えると、安定した王権を背景として、フランス本国だけでなく、まだ地方言語が乱立していて統一的な「国語」をもつにいたっていなかった他のヨーロッパ諸国においても、宮廷社会や貴族階級の共通言語として普及していった。こうしてフランス語は、この時期までに汎用性の高い外交言語としてのタクエツ[c]した地位を確立していたのである。

いまや英語一色に染めあげられつつある感のある現代世界に生きる私たちには想像もつかないことだが、かつてはフランス語こそが(あくまでもヨーロッパにおいてという限定つきではあるけれども)異なる諸地域をあまねく[8]統べる「普遍言語」だったのであり、各国の上流階級の子弟にとっては、これを習得することが社会のエリートとなるためには必須の条件であった。先の懸賞論文がベルリンのアカデミーによって募集された背景には、そうした事情がある。

ほぼ二世紀にわたってヨーロッパに君臨していたフランス語の特権的な地位は、フランス的思考に合理主義と並ぶもうひとつの特徴を与えてきた。すなわち、「[C]主義」という特徴である。

言語の普遍性にたいする信頼は、容易に思考の普遍性にたいする確信へと横滑りする。じっさい、自分がフランス人だと仮定して、他国の名士たちがこぞってフランス語を話している場面を想像してみようではないか。格別の愛国者ならずとも、私たちは無意識のうちに、このような共通言語で紡ぎだされる自分たちの思考こそが世界の標準であり、規範であるという、不遜な自負の念を抱かずにはいられまい。

この自負の念は、自然な成り行きとして、さらに自国の文化や歴史の普遍性にたいする確信へと肥大していくであろう。じっさい、さまざまな揺り戻しや紆余曲折を経てのことではあったが、大革命を経て君主政を清算し、共和政への道程を駆け足で進んでいった一九世紀のフランス人のあいだにも、フランス語のみならず、フランス文化そのものが世界にカンたる支配的文化であり、自国の歴史はそのまま人類全体の歴史であるという認識は、根強く残っていたように思われる。

（石井洋二郎『フランス的思考』による）

問一　二重傍線部a「ヨチ」を漢字に直すとき、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は[16]。

① 予知　② 誉知　③ 与地　④ 余地　⑤ 輿地

問二　空欄[A]に入れるのに最適なことばを、次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は[17]。

① あるいは　② しかし　③ しかも　④ そのうち　⑤ それゆえ

問三　傍線部1「そのような特権」とはどのようなことを意味するか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 18 。

① 普遍性をもつこと
② 明晰性をもつこと
③ 明晰にして判明であること
④ 支配階級の言語であること
⑤ 格調の高い言語であること

問四　傍線部2「件の一文」の「件」の読み方として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 19 。

① あうん　② うしろ　③ くだん　④ けん　⑤ れい

問五　同じく傍線部2「件の一文」とは何か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 20 。

① 「明晰」という言葉
② 「フランス語の普遍性について」
③ 「フランス語の構文は不滅なのだ」
④ 「フランス語は明晰な言語である」
⑤ 「明晰でないものはフランス語ではない」

問六　二重傍線部b「キする」のカタカナ部分を漢字に直すとき、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 21 。

① 企　② 希　③ 祈　④ 基　⑤ 期

問七　傍線部3「それ」の指示内容として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 22 。

① フランス語　② 直接的語順　③ 独自の特権　④ 道理　⑤ 文体

問八　空欄 B に入れるのに最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 23 。

① さらに　② その一方で　③ だからこそ　④ にもかかわらず　⑤ やがて

問九　傍線部4「『フランス語は明晰な言語である』という神話」とあるが、ここに「神話」という比喩表現が用いられている理由はどのように考えられるか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 24 。

① フランス語こそが世界の標準であり、規範であるという自負の念を含意する。

② 「普遍言語」としてヨーロッパ諸国に君臨することになったフランス語の特権的な地位を暗示的に示す。

③ 一七世紀の絶対王政下で、疑いをさし挟むことを許されぬ神聖な事実として権威化されていった経緯を含意する。

④ 具体的な根拠がないにもかかわらず、権威ある真実として多くの人々に信じられるようになったことを示す。

⑤ あたかも神話であるかのように、その後も多くの人々によって語り継がれ、信じられたことがらであることを示す。

問十　傍線部5「ヨーロッパの他地域でも広く共有されていた」とあるが、その理由の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 25 。

① 当時、フランス語は汎用性の高い外交言語としての地位を確立していたから

② アカデミー・フランセーズによって、規範的なフランス語の辞書が刊行されたから

③ 当時、すでに「フランス語は明晰な言語である」という神話がヨーロッパ各地に拡大していたから

④ 安定した王権を背景として、フランス絶対王政はヨーロッパ各地をその支配下におさめていたから

⑤ 太陽王ルイ一四世の絶対王政下、フランス語は厳密に規格化され、フランス固有の「国語」として純化されたから

問十一　傍線部6「『国語』の語義として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 26 。

① 王権の言語
② 民族の言語
③ 国家の言語
④ フランス語
⑤ フランス人の母語

問十二　傍線部7「肝煎り」の語義として最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 27 。

① 周旋　② 厳命　③ 奏上　④ 提言　⑤ 発案

問十三　二重傍線部c「タクエツ」を漢字に直すとき、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 28 。

① 択越　② 拓越　③ 卓越　④ 託越　⑤ 琢越

問十四　傍線部8「あまねく」と同じ意味で用いられている漢字を次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 29 。

① 世　② 安　③ 俗　④ 判　⑤ 普

問十五　空欄 C に入れるのに最適な語を次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 30 。

① 規範　② 事大　③ 自由　④ 覇権　⑤ 普遍

問十六　二重傍線部d「カンたる」のカタカナ部分を漢字に直すとき、最適なものを次の①～⑤から選び、記号で答えよ。解答欄番号は 31 。

① 完　② 冠　③ 巻　④ 幹　⑤ 鑑